

演題番号：C3

## 誘発因子として細菌感染症を疑った多型紅斑の犬における獣医皮膚科学的検討

○為近俊幸，為近佐智子

なにわ動物病院・兵庫県

1. はじめに：犬の多型紅斑は薬物を誘発因子とすることが多いとあるが解明に至らない事例も多々存在する。今回誘発因子として細菌感染症を疑った多型紅斑の犬に遭遇し獣医皮膚科学的診断に基づいて検討した。

2. 材料および方法：犬、トイ・プードル、メス避妊済、8歳2ヶ月齢。頬部口腔粘膜に偽膜様潰瘍形成をともなう炎症性病変および下腹部に膿痂皮を認めた。口腔粘膜細胞診にて、細菌貪食像を伴う好中球浸潤および数種類の細菌を認めた。同部位グラム染色にて、グラム陽性球菌・短桿菌様およびグラム陰性短桿菌・フィラメント状桿菌を検出した。皮膚病変細胞診においては炎症細胞や細菌等は認められなかった。精査目的に口腔粘膜病変の細菌培養・薬剤感受性試験および口腔粘膜および下腹部皮膚病変のパンチ生検を実施し、治療目的に抗菌薬療法と動揺歯の抜歯および歯石除去を実施した。

3. 結果：細菌学的検査：*Streptococcus canis* ( $\beta$ 溶血性)、*Escherichia coli*、*Klebsiella pneumoniae*、*Bacteroides pyogenes*が分離された(薬剤感受性試験結果省略)。病理組織学的検査：口腔粘膜・皮膚病変ともに多型紅斑/中毒性表皮壊死症と診断された。抗菌薬療法・歯科処置実施後、再燃な

く順調に推移している。

4. 考察および結語：本症例は口腔病変の進行速度や全身状態の悪化、悪化に伴う皮膚病変の出現から、皮膚・口腔粘膜病変の原因が同一の可能性を考慮し診断治療に至った。病理組織検査所見から、尋常性天疱瘡や表皮下水疱症等の自己免疫性疾患の可能性は低いものと考えられ、皮膚・口腔粘膜病変共にアポトーシスを呈することから多型紅斑と診断した。また皮膚病変においては重症度が低いと評価し、口腔粘膜病変優位型と臨床的に診断した。症例においては、(1)初診時直近1ヶ月以内において薬物の使用や食事の変更等がないこと(2)敗血症の可能性が示唆されたこと(3)抗菌薬が著効したこと等から、細菌感染症を誘発因子とする多型紅斑と臨床的に診断した。病態機序として、歯周病による口腔内環境悪化に伴い局所免疫力が低下し分離培養された細菌のいずれかが病原性を発起した結果、口腔内における病変形成および感染巣とは異なる下腹部皮膚における何らかの免疫応答の出現を推測した。